

「この度、仏恩によりまして此の庵の留守番に座らせてもらう事になりました」(「入庵雑記」)

自由律俳句の異才である尾崎放哉が、香川県小豆島に渡ったのは1925年8月。死までの8カ月間、病と向き合い命を削りながら、島の自然や日々の生活を詠み続けた。

咳をしても一人残された句は素朴ながら、俗世に背を向けた人間の孤独と潔さが心にしみる。

高松から高速艇に乗って約30分。土庄港に着くと、目の前に高さ394mの皇踏山がそびえる。新緑と岩の連なりが美しい。終焉の地である南郷庵は港から歩いて約40分。「小豆島尾崎放哉記念館」に生まれ変わっている。

小さなおぼろ家を想像していたが、再建された家は思っ

たより立派だ。土庄町臨時職員の九富美樹さんによれば来館者は俳句愛好家ら年1500人ほど。「年配の男性は地位も名誉も捨て自由を手にした放哉の生き方にあこがれるようですが、女性からは共感できない」との声も聞きます。

障子あけて置く海も暮れ切る
海側になだらかに下ついていた畑は宅地に変わり、家の屋根が視界を遮る。裏山の斜面の共同墓地に放哉が眠る。

「放哉」南郷庵友の会の森克允さん(69)に町を案内してもらった。90年近い時を経て、放哉が通った酒屋や医院、郵便局などは姿を消したが、西光寺のイチヨウの太木や入り組んだ路地、土石の塀は昔のまま。土庄町は近年、この界隈を「迷路のまち」として売り出している。

酒をやめられず小豆島でも問題を起した放哉だが、町の人とのつきあいは少なかつたようだ。西光寺の前で金物店を営む四橋一男さん(65)は「亡くなった祖母はそんな人がいて、学歴があるらしいとしか知らなかったと話していた」と言う。

酔った放哉が子どもたちに舟を出させ、寂しさに慟哭した入り江は、今、エンジェルロードと名付けられ恋人たちの聖地になっている。海岸を歩いてみると海のおちこちで、魚が思わぬ高さまで跳びはねる。

眼の前魚がとんで見せる島の夕陽に来て居る
病み衰えた放哉が息を引き取ったのは4月7日。5月の陽光に輝くこの海を見ることはなかった。

(編集委員 岩田三代)

入れものが無い両手で受ける

落。健康を害し、妻とも別居する。西田天香が主宰する京都の修養団体・一燈園や、数方所の寺男を経て小豆島に渡る。

自由律俳句の師である荻原井泉水は、小豆島での生活を世話した井上一二や西光寺住職の杉本有玄を紹介するなど、一貫して放哉を支えた。作家の吉村昭は85年に小豆島での8カ月を描く小説「海も暮れきる」を執筆。種田山頭火と並ぶ漂泊の俳人として愛好者は多い。

(作品の引用はちくま文庫「尾崎放哉全句集」村上護編、写真 は鳥取県立図書館提供)



香川・小豆島 (100805)
1926 鳥取県生まれ。
本名・秀雄。東京帝大卒。大手生命保険会社で課長にまで昇進するが、酒におぼれ人間関係に嫌気がさして会社員生活から脱